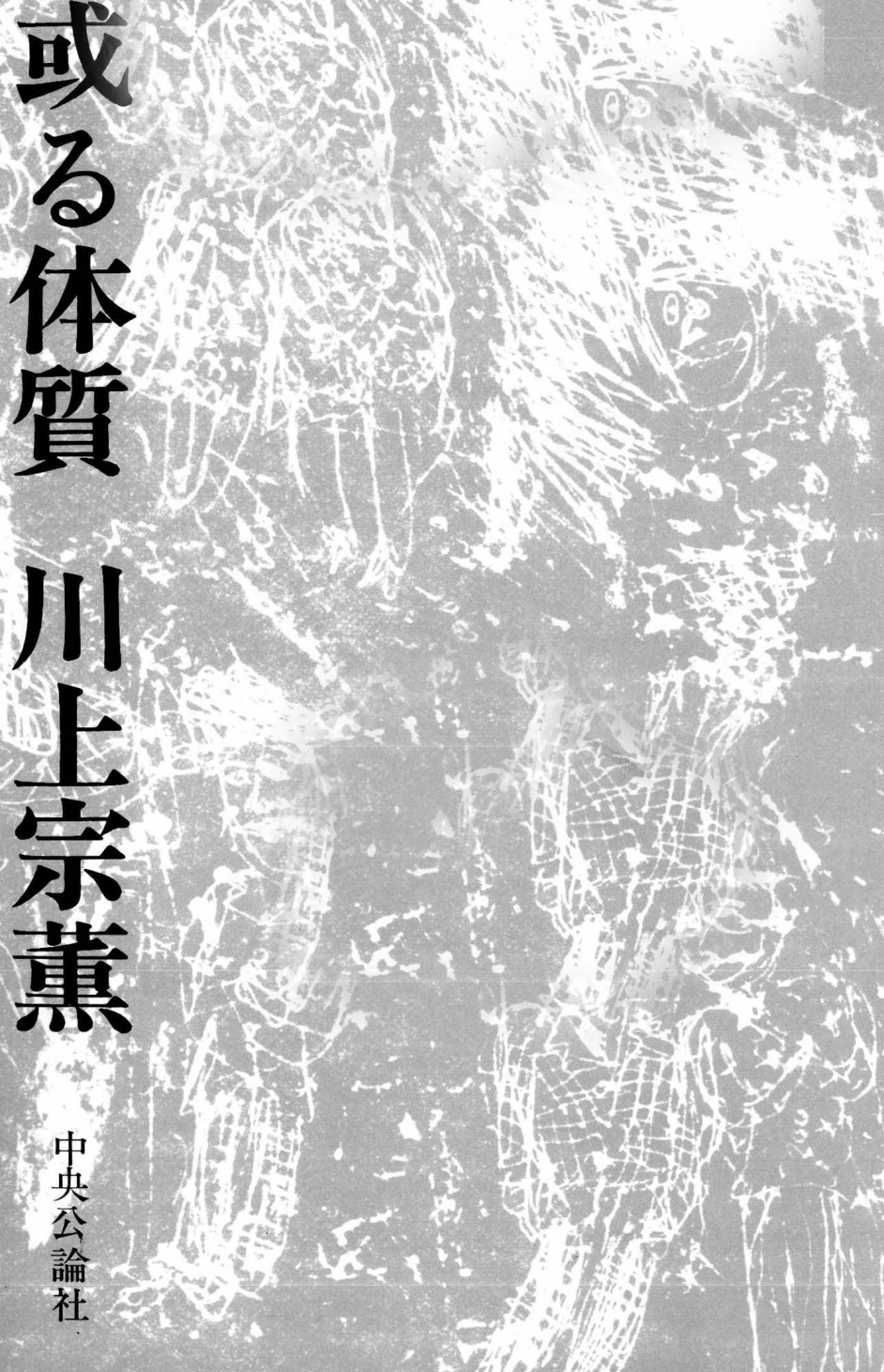


川上宗薫 或る体質





或る 体質 川上宗薫

中央公論社

或る体質

定価五五〇円

昭和四十七年十一月五日印刷
昭和四十七年十一月十五日發行

著 者 川上宗薫

發行者 山越 豊

印 刷 三晃印刷

發行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話(五六一)五九二一

振替東京三四

©一九七二 検印廃止

もくじ

五十メートルなら

牧師の息子

バカな時代のピエロ

ピンポン野球史

弱者の発想

国辱の犬

サンフランシスコは大晦日

溜り場

5

41

72

102

130

165

202

236

装帧
永田
力

小説集
或る体質

五十メートルなら

私が生まれたのは愛媛県であるが、愛媛県のその卯之町についての記憶は、ほんのわずかしかない。

私は、三歳になった時に大分県の竹田へ移って行ったからだ。

卯之町についての記憶の一つは教会である。父はプロテスタントの牧師だった。

その教会の塔に、女の子に連れられて私は昇ったことがある。昇った記憶があるだけで、その教会の塔から見た景色についての記憶はない。

私を連れて昇った女の子のことを、父や母は玉井のミツちゃんと呼んでいた。

私の家では、そういう呼び方がよくなされていた。本郷のショウちゃんとか大気おおきのジロウさんというふうにある。

ほんとうの名は、玉井ミツ子であり本郷正三郎であり大気寿郎であった。

その卯之町にいる頃、鉱石ラジオというものがその町にやってきた。

母が黒い色の受信機を耳に当てている姿を、私は憶えている。

その場所は、広い帳場のような処で、妙に寒々とした感じであったということも併せて憶えているのだが、その場所は、母が黒い受信機を耳に当てていた場所とはちがうのかもしれない。

それから、雪の日に、下駄の歯に挟まった雪を父が取ってくれたこと。

そういうことだけが点々と記憶に残っている。

竹田の町となると、これは、私の記憶の中ではかなり鮮明である。

なぜなら、私は、その三つ四つの頃から小学校の四年までの間、竹田の町で過ごしたからである。担任の先生の名前も憶えている。一年の時は小林先生、二年になって、女の茨城先生と男の二宮先生、三年、四年は橋爪先生。

その頃、どういうわけか、小学校の先生たちは黒い詰襟の服を着た人が多かった。橋爪先生は背広だった。

私は幼稚園に行かなかったので、入学式の日、一人取り残されたような気持ちを味わったものだ。

それは、淋しさというよりも妙に虚けたような気持といつてよい。

幼稚園からきた男の子たちは、幼稚園で習い憶えた歌をしきりに歌う。そして、みな元気がよかった。

私には、竹田の頃、特に先生からかわいがられたとか眼をかけられたという記憶はない。それは、私が潑刺はつちくとしていない、どこか無気力で脆弱な感じであったせいだろう。

それに勉強もまん中より少し上ぐらいで、そんなにできはしなかった。

小学校一年の時に、国語の教科書を読まされたことがある。国語のことをその当時は読方よみかたといっ

ていた。その中にたしか林^{はやし}という字が出てきた。

私は、前日、母にその個所の読み方を教わっていた。読んでいるうちに、ふと自分の声が母の声に似ているように思われ、急に涙ぐんだことがあった。

どういうわけか、私たち兄弟は、人の前でないかやる時涙ぐんだりする気の弱さを持っていた。

その傾向は、一つちがいの弟理郎^{みちお}に著しく、学芸会があつてなにかの朗読をする段になると、だんだん彼は溢れ出ようとする涙を^{こら}休める顔になり、遂には休えきれなくなり、ワッと泣き出して壇上から走り降りてしまふのだった。

その気持が私にはよくわかったが、私は、理郎ほどそういう傾向が強くなかったので、せいぜい涙が出かかっているのを覚えるぐらいで済んだ。

竹田の小学校の中に、小さい男の子で福本というのがいた。特に私は福本と仲がよかったわけではないが、その男の子の名前を憶えているのは、私が三十過ぎになって夢を見た時、その男の子が出てきたからである。

そして、夢の中で、私は自然に福本という名前を知っていた。

眼が醒めたあとでもその夢は残っていて、どういうわけか、夢を見なかったらすっかり忘れていたにちがいない福本という名前を、私はずっと記憶に叩きこまれることになった。

私は、からっきし意気地のない喧嘩の弱い男の子だった。

一番喧嘩が強いのは、モッサと私たちが呼んでいた朝鮮人の男の子である。年は私たちよりも二つ三つ上であった。

私の特技といえ、ただ走るだけである。

モッサが一番速く、続いて背の高い戸川、次が私で、四番目に、たしか秋本というのがいた。

しかし、私は、スタートに関する限りは一番速かった。もしも五十メートルの競走があれば、おそらく、私はだれにも負けなかったにちがいないかった。

私のもったいぶった恰好をするのは走る時だけである。

その時だけ私はへいづものおれとはちがうんだぞ」といった顔や態度をして見せるのだった。

そして、走ったあと、たいてい私は、その四、五人の組では一等になるので、そのあとしばらくの間、得意な気持のために上ずってしまい、だれがなにをいっても耳に入りはしなかった。

授業の時に小林先生が席の間を行ったりきたりする。その時、小林先生の体臭が匂う。私は、その体臭に、あるこわさのようなものを感じていた。

それは、朝礼の時などでもそうである。「前にならえ」をしていて、ちょっと私が右か左にはみ出ているのを見つけた小林先生はやってきて、私の体を押す。

そんな時にも、小林先生の体臭が私の鼻孔いっぱいに寄せてくるのだ。私は、やはり同じようなこわさを感じた。

そして、そんな時、私の知能指数は甚だ下がってしまい、そんな時に質問をされても、私はうまく答えることができないのだった。

また、私は弁当を食べるのがたいそう遅く、昼休みの時間いっぱいかかってまだまだ食べ終ることができず、必ず放課後の時間まで入ってしまうのだった。

私自身としては、なるべく休み時間中に食べ終えたい気持である。処が、どんなに努力しても食べ終ることができないのだ。

そんな私を、先生は、

「川上はよく噛んで食べるからいい」

と、一度褒めてくれたことがあるが、それが度重なると褒めなくなった。

そんな私は、後に兵隊に行ったが、内務班で食事をする時はほかのだれよりも早かった。

私は、いったいどこからそんな私になったのかと考えると、狐に抓とらまれたような気持である。

モッサのサは、これはこの地方では一種の敬語のようなものである。

私は宗薫むねかほという名前であるが、もしも私に仲間が敬語をつけるならば「宗サ」と呼ばれる処である。

モッサは、昼休みの時間になると、席の間を廻ってみんなからお菜おきを徴収して歩く。モッサのあとに続くのは、後藤とか、もう一人名前は忘れたが、体の大きい男の子の二人である。

その二人が、モッサに続いて喧嘩が強かった。だから、クラスの約五十人の男の子たちは、この三人からお菜を少しずつ巻き上げられていたのである。

そして、モッサはときどき××退治を企画した。

モッサの次に権力を張っている後藤などが、その退治の対象にされる。

すると、モッサの子分である志賀とか小田原などが、近くの中学校の校庭で、逃げる後藤に喰らいついたり殴りかかって行くのである。

私は、それを見た時、肝を冷やさされたものだ。まったく勇敢そのものであったからだ。しかし、その勇敢さの支えになっているものは、モッサの存在であるにちがひなかった。

後藤も、もう一人の男の子も、その退治の日には抵抗をしなかった。ただ逃げる一方である。志賀は勉強のできない子だったが、そういう勇猛ぶりの点で、かなり評価されていた。

その当時は満州事変が勃発したばかりである。つまり、日本の軍国的な風潮が濃くなり始めた頃なのであった。

その風潮と、牧師の家庭の雰囲気とは、相容れないものがあった。

私の家には、ときどき宣教師が大分から車でやってきていた。その車は凸字型をした流線型で全体がピカピカしていた。

その頃、全体がピカピカしているような自動車は、この町には一台も走っていないかったので、その車が教会の前に停まると、人々は見に集まってきたものだ。

教会といっても塔があったりするわけではなく、以前郵便局であったのを使っているだけである。したがって、牧師館も普通の家のような造作ではなく、玄関を入るとすぐが、ピンポン台を一台充分に置けるぐらいの広さの板の間であり、そこを上がった処が居間になっていた。

そのピンポン台を置けるような広さの右側が礼拝堂である。左側の方にも広い板の間があって、そこは日曜学校に使われていた。

そこから二階に上がると、右側に十畳の間があり、廊下を進むと廊下の左側には二つほど部屋が

あり、突き当りにも広い部屋があったが、そこは広い物置場になっていた。だから、私たち子供は、その向うにはなにかお化けが住んでいるような気持がしたものである。階下にも二階にも便所があった。二階の便所は渡り廊下のような処を伝わって行かねばならず、夜はこわく、冬になると寒い風が吹きつけてきた。

遠くに大正公園の山型の森が見え、その木立が空にくつきりとしたシルエットを浮かべているのを、私は、よく夕方眺めたものだ。

その大正公園を背景にして深夜火事があったのを憶えている。私はどういうわけか、火事を見ると足が顫えて仕方がなかった。いまにも自分が死ぬのではないかといった感覚に襲われて、息が苦しくなる。

そういう感覚を、私は、神楽を見ている時にも同じように経験した。

岡神社という神社があって、そこに神楽を見に行ったことがある。あのお面が、私にそういう感じを起こさせるのかもしれない。

私は、いまにも死にそんな感覚に包まれてくるので、一時も早く神楽が見える処から遠ざかりたいのだが、私を連れて行ってくれた親に、その感覚をわからすことができなかったので、私は我慢する以外になかった。

夜寝る時になると、私は二つの苦しみを味わわねばならなかった。

その一つは息苦しさであり、もう一つは、自分が盲目めくらになったのではないかといった恐怖である。呼吸を、私は一つ一つ意識し始める。すると、いまにも息が止まって死ぬのではないかといった

胸苦しさに襲われてくるのだった。眠っている間に息を吐くのを忘れたらどうしようというふうに、私は考え始める。そのために、とても眠ってはおれなくなる。

寝る時にはいつもそれが家のしきたりで部屋の中をまっ暗にしなければならなかった。闇に向って眼を開いているとなにも見えない。

私は、自分が急に盲目になったのではないかといった不安に襲われ、頭を擡^{もた}げる。頭を擡げた処に、雨戸の下の方の節穴から仄明るい光が差しこんでいるのが見える。

その節穴を眼にすると私は安心する。しかし、その節穴も、じっと見つめているうちに闇の中に紛れて見えなくなってしまう。

私は動転し、その節穴を捜し始める。と、方向がわからなくなった私の眼に節穴がとんだ方向に見えたりするのだった。

学校では、神社の前を通る時は必ず頭を下げるようにと教えられていたが、私の家では、神社などで頭を下げることは無いというふうに教えられていた。

私の家において、神とはキリスト教の神以外にはなく、学校では絶対の存在として私たちに教えこまれている天皇も、私の家では、ただの人間にすぎなかった。

私は、神社の前を通る度にあいまいな礼の仕方をした。いつも近所の仲間たちと一緒に学校に出かけて行くのだが、仲間たちは、必ずはっきりと岡神社の前で頭を下げるのだ。

私はそういうことを潔^{いさぎよ}しとしなかったが、といって、胸を反って歩くというわけにもいかず、なにか下を見てものを捜すような、そんな姿勢で鳥居の前を通り過ぎるのだった。

私は、学校の男の子たちが着ている小倉や霜降りの服装に憧れを持った。彼らは長いズボンをはき、金ボタンの五つついた詰襟の服を着ている。

処が、私の家ときたら、そういった服は一切着せてもらえなかった。半ズボンでシャツのような服である。

これは私の親の趣味で、いわゆるハイカラ趣味なのである。冬はセーターである。

私は、そういった服をそれほど好きではなかったが、ただ一つだけ好きなのがあった。

それは、やや真珠色がかったクリーム色の富士絹の長袖のブラウスのような上着である。その生地はたいそう柔かく、走ると、背中が風でふくらんだ。そのふくらむ感じが私は好きだった。

そして、どういうわけか、その富士絹の肌ざわりや風にすぐにたわむ生地の性質のせい、それを着ていると、私は、自分が女性的な感じになるのを覚えた。そして、これもまたどういうわけか、その女性的な感覚がかなり気に入っていた。

いつも着る服を選んでくれるのは母だったが、富士絹の日になると、私は、私の胸が急に明るく弾んでくるのを覚えた。

私は、学校から家に帰る途中はしょっちゅう走っていた。走る方が歩くよりもずっと多かったような気がする。そして、それは学校と家との往復だけでなく、どこに行くのにも、私は走ってばかりいたような気がする。

そんな私を、クラスメートたちは流線型と名づけていた。

神様を私が見たのは、たしかその頃のような気がする。あれは小学校の二、三年の頃だったにち

がない。季節は忘れている。

その場には、たしか父と母がいた。部屋は階下の居間である。玄関から上がって、広い板の間を通り過ぎた突き当りの居間の左手に押入れがある。その押入れから神様が出てくるというのである。

父がそうだったのだ。

父がどういふふうにあったか、私は正確に憶えていないが「これから神様が出てくるから見ておけよ」というふうな意味のことを、私にいったのかもしれない。

その時、弟の理郎がいたかどうか、私の記憶にはない。

押入れは、開けると上段と下段に別れている。

父が押入れを開けたのか、それとも、神様が、押入れを一人で開けて出てきたのか、その処も、私ははっきり憶えていないが、たしか神様は下段から出てきたような気がする。そして、眼鏡をかけていた。それからどこかに行ってしまったのである。

急に消えてなくなったというような記憶はないので、おそらく、居間を通過して玄関から出て行ったにちがいない。

私の父や母が、神様を見て特に敬虔な顔をしたという記憶も私にはない。

ただ、私は、父が「出てくるぞ」といったその神様がじっさいに出てきたということに驚いていた。

その神様はそれほど年を取っていなくて、どこか学校の先生のような感じの男だった。